学位論文本審査報告書：

平成 28 年 1 月 18 日

論文題目　　台湾における観光旅行事業史 1920 ～ 70 年代
—日本統治時代・国民党時代の政策と関連させて—

論文提出者　呉米淑

1　論文内容の要旨

1）本論文の特色

本論文は、学術論文 4 本（内、レフリー付き 2 本）、研究ノート 1 本（レフリー付き 1 本）、学会・研究会発表 7 回（内、国際学会 1 回、全国学会 2 回、地方学会・研究会 4 回）、及び現在、投稿審査中の論文 1 本、投稿中論文（レフリーなし）1 本を基礎に、さらにそれらに考察、加筆・削除、修正、分析を加え、作成したものである。

現在、台湾観光は極めて盛んであるが、本論文はそれを学問的、歴史学的に考察、分析、位置づけようとした労作である。日本植民地時代の 1920 年代における日本人、台湾人の相互の観光旅行、もしくは視察旅行を双方から構造的、かつ実証的な分析を加えた。その結果、観光旅行は日本の台湾植民地政策の一環をなし、インフラ整備、資源開発と密接な関係にあることを解明した。また、従来、研究が皆無であった日本軍人の台湾観光に焦点を当てたこと、日本敗戦後、蔣介石・国民政府が観光政策を重視していたことに光を当てたことも本論文のオリジナリティと言えるであろう。さらに戦後の日台人的・経済交流を歴史的に解明した。このように、単なる観光旅行史にとどまらず、植民地台湾時代の人的（軍人を包括）、あるいは物的（台湾の樟脳などの資源を含む）交流などに視野を広げ、歴史的背景を押さえ、考察を加えた。論理展開、史料分析は今後、さらに強化する必要があるとはいえ、構想力、着実な研究、史料収集能力、実証力はレベルが高い。

2）本論文の構成と各章の概要

本論文は序章、第 1 章～第 6 章、終章、及び付録、史料・参考文献で構成されている。なお、本論文は 156 ページ（400 字詰め約 400 枚）である。構成は以下の通り。

序　章（先行研究と問題の所在、各章内容の説明）
第 1 章　日本人の台湾旅行・視察— 1920・30 年代—
第 2 章　台湾人の日本旅行・視察— 1920・30 年代—
第 3 章　政府機関と民間団体の観光政策—日中戦争期—
第 4 章　台湾観光事業と日本軍—日中戦争期—
第 5 章　政治激動下の台湾観光実態とその推移— 1940 年～ 50 年代—

第 6 章　台湾経済成長期における観光旅行政策― 1960・70 年代―
終　章
付録「1920 ～ 70 年代の台湾観光史大事記」
史料・参考文献

各章の概要は以下の通り。

第 1 章は、日本人の視点から、1920 年代から 37 年まで台湾の観光事業の変遷を論じる。それは、物資運輸や市場開発と連動し、植民地経営の一環であったと論じる。

第 2 章は、第 1 章と同時期、台湾人の日本観光旅行の実態と特徴を論じる。台湾人の商人、修学旅行、原住民に日本旅行をさせたことは、近代化した日本の優位性を実感させ、植民地経営を円滑にする上で重要な影響を及ぼしたとする。

第 3 章は、日中戦争の勃発後、「観光報国」政策に即して日本人の台湾観光がどのように推進されたかを解明する。これは日本の南進政策と密接な関連を有していた。また、台湾原住民を旅行させることで、戦時認識の徹底化を図った。

第 4 章は、台湾における観光旅行政策と日本軍との関連を考察している。休暇の時、日本兵士が台北の観光スポットを見学する自由が与えられ、これによって休息させ、日本軍の戦意の維持、高揚を図った。

第 5 章は、観光空白期と見なされてきた日本敗戦、国民政府軍の接収という 1945 年から 50 年代の観光政策を歴史開拓的に論じる。これによって戦後台湾の観光事業の転換と発展をアメリカによる援助金と絡めて考察する。この段階で日本統治期に否定された中華文化や原住民文化が復活した。

第 6 章は、1960 年代に入ると、アメリカの援助金は漸減したが、その結果、台湾の経済自立化が図られ、観光事業政策が経済改善の一環とされた。外国人や華僑に対して「自由中国」や「反共復国」を宣伝、観光誘致を積極的に勧誘することで支持を獲得、外貨保有も増大した。この結果、台湾の財政問題、観光設備改善に役立ったと論じる。

終章は結論に当たり、日本統治期、その植民地政策に伴い発展した。日中戦争勃発後、観光政策は国防宣伝と結びつけられ、日本化が強化され、台湾の伝統は否定された。1945 年国民党政権が復権すると、逆に日本化は徹底的に否定された。この双方に問題があり、現在、台湾の観光政策はその双方の長所を採り入れることで、アメリカ支援を含めて、台湾の経済、観光事業にとって健全に動き出したという結論を導き出す。いわば中華文化、原住民文化、及び当初国民党政権下で否定されてきた日本文化遺産も観光面で復活し、台湾観光を豊富にしたとの結論を導き出すのである。

なお、本稿末尾の「1920 ～ 70 年代の台湾観光史大事記」は独自に作成したもので、参考になる。